

恭仁宮雜考

磯野浩光

1. はじめに

「今造る 久邇の都は 山川の 清けき見れば うべ知らすらし」(『万葉集』巻6-1037)と大伴家持に讃えられた恭仁宮であったが、彷徨五年と言われる不安定な政局の中で、結果的には天平12年(740)12月から天平16年(744)2月までの3年余の都であった。

京都府教育委員会による1973年度からの恭仁宮跡の継続的な発掘調査によって、大極殿など一部の主要殿舎の規模、詳細と宮の四至などは確定^(注1)したが、宮内では内裏の範囲や詳細、朝堂院など主要官衙の配置や規模などまだまだ不確かな点も多い。京についても、考古学的には宮に隣接する東面大路・南面大路の一部と推定朱雀大路側溝の可能性のある溝以外の遺構は検出されておらず、条坊施工の進捗状況は依然不明で、京域は想定案にとどまっているのが現状である。

そこで小稿では、恭仁宮・京について研究略史を振り返り、今後の課題のいくつかについて少しく検討を加えてみたい。

2. 研究略史

恭仁宮・京の所在や沿革については、江戸時代から『山州名跡志』・『山城名勝志』・『山城志』などの地誌類に取り上げられていた。中でも『山州名跡志』は宮を現在の加茂町法華寺野付近に、『都名所図会』・『京師巡覧集』は木津町鹿背山付近に比定し、『山城志』は京を現在の加茂町瓶原、山城町上狛、木津町木津付近と想定していることが注目される。

明治以降は本格的に各々の所在論や遷都の理由に関する考察が展開された。宮に関する実証的な調査・研究の嚆矢というべきものは、1899年、瓶原村有志が恭仁尋常高等小学校奥本沖太郎校長を調査委員として現地調査、比定を行って刊行した『恭仁京志』^(注2)であり、地元有志によって、これら遺跡の研究・顕彰がいち早く行われたことも特筆される。同年、最初に学術雑誌に恭仁宮を取り上げたのが木村一郎^(注3)であり、翌年から喜田貞吉の一連の先駆的な研究が公にされた^(注4)。それらに続いて、考古学や国文学の分野からの研究が次々に発表された。

宮域は、おおむね木津川北の瓶原の地に求める喜田説が主導的役割をはたし、それを支持する説が多かったが、『山州名跡志』以来の木津川の南に求める「河南説」、すなわち加茂町法華寺野付近に比定する説などがあった。「河南説」は、『万葉集』の「(略)山城の鹿背山の際に 宮柱 太敷き奉り(略)」(巻6-1050)、「をとめ等が うみを懸くとふ 鹿背の山 時の往ければ 京師となりぬ」(巻6-1056)という歌や、『続日本紀』天平17年(745)5月癸亥条の聖武天皇の紫香樂宮から恭仁宮への行幸ルート of 解釈などを根拠としたものであり、1920年代から1960年代まで瓶原説と活発に論争が行われたことは学史として明記すべきであろう。

京域は、『続日本紀』天平13年(741)9月己未条の「賀世山の西道より東を左京とし、西を右京とす」という記事について種々検討された。喜田は『山城志』同様京域を「瓶原・加茂の2村から木津町、上狛村地方」つまり西は山城町上狛、木津町木津から東は加茂町瓶原、加茂の木津川の南北と具体的に推定した。その他、木津町木津付近に比定する説などもあったが、他の都城の京域の規模が徐々に明らかになるにつれて、平城京と同程度の範囲をいかに現地に当てはめるかが苦慮され、以下の足利説が発表されるに至った。

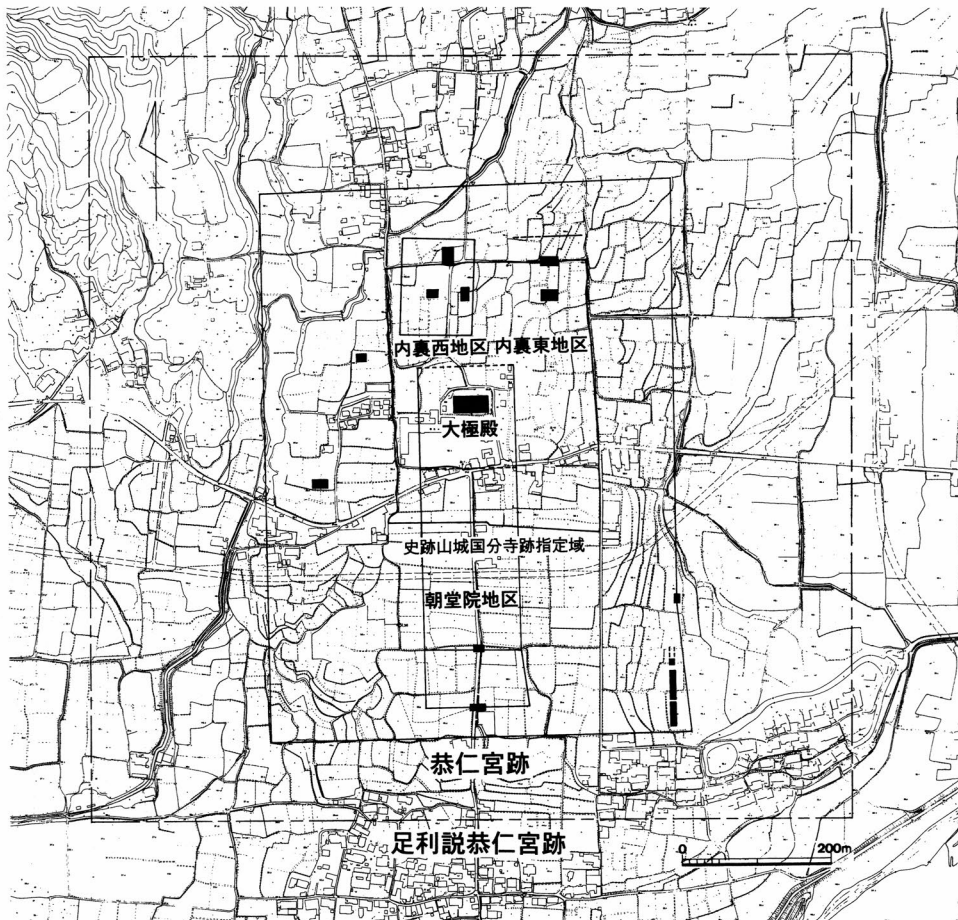
遷都の理由については、多くが瓶原の地が交通至便でかつ風光明媚であったことを挙げている。その他では、天平9年(737)に藤原不比等の四子が相次いで病死した上、同12年に広嗣の乱が起こって藤原氏の権勢が低下した時に台頭してきた橘諸兄が、自分の別業の近くに都を建設しようとしたという喜田説が支持されている。さらに、木津川が京域を東西に貫流する地勢が中国洛陽に似ているのでこの地が陪都として計画されたという瀧川政次郎説(注5)や大仏建立のための拠点としての仮の都であったという瀧浪貞子説(注6)などがある。和田萃や井上満郎は、「大宮垣」を築いた功により、正八位下から一躍従四位下という破格の叙位にあづかるなどした秦下嶋麻呂などの渡来人が宮都造営に果たした役割を重視している。(注7)一方廢都の理由は、天平14年(742)の紫香樂宮造営、同15年の恭仁宮の造営中止、同16年の難波宮遷都、同17年の平城宮への遷都という不安定な政局とそれに伴う膨大な経費支出に対する措置の一つとして理解されている。

研究史上の画期は、1969年から次々と発表された足利健亮の歴史地理学的な研究と1973年度からの京都府教育委員会による発掘調査等の実施である。

足利健亮は、航空写真、小字名や現地の詳細な地形の観察、測定などから宮域や京域についての詳細な研究を次々に明らかにした。まず、これら地理学的な研究と平城宮のプランを参考にして、加茂町立恭仁小学校北の土壇を大極殿跡と考え、大極殿の南に朝堂院、北に内裏を想定し、これらを含む8町(約1km)四方を明確に宮域として提示した(第1図)。続いて京域も、基本的に南北九条、東西八坊の平城京原初プランをあてはめて計画されたも

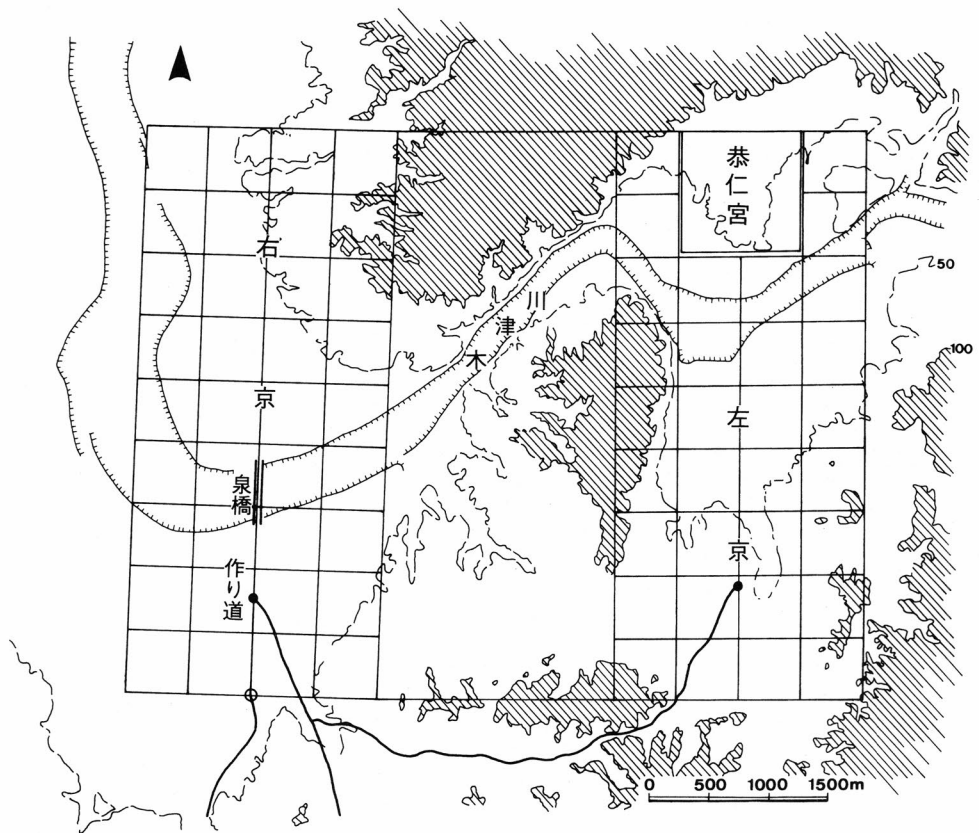
のとし、右京中軸線を木津町の「作り道」に、左京中軸線を大極殿及び宮域の中軸線として復原し、左、右京とも各4坊の条坊と推定した。その結果、木津町鹿背山付近に、京内ではあるが、条坊の敷かれていない方形の地域をもうけ、この東西に左京と右京を分割し、左京の北端に宮を配置するという独自の学説となり、その規模は東西約6.1km、南北約4.8kmとなった(注8)(第2図)。このように明確に示された足利説は、恭仁宮・京の研究についての大きな指針となり、以降の研究は必ずこの説を出発にして行われることとなった。

発掘調査は、1973年度に文献調査などの予備的調査が、翌1974年度からは現地の発掘調査が実施された(注9)。この調査は、足利説が発表された後であり、足利説恭仁宮－歴史地理学的研究を考古学的に検証するという意味も持つとともに山城国分寺の遺構等の解明にもつながった。さらに、このころ他の都城や三重県齋宮跡などの大規模な官衙の発掘調査も次々と着手されており、これらの成果と相互に補完しながら調査が進められた。まず、明治以来想定されていた恭仁小学校に北接する土壇がまさしく大極殿跡であり、大極殿は『続日



第1図 恭仁宮跡の範囲(注1 報告書から転載)

本紀』の記事どおり国分寺に施入されて、金堂に再利用されたことも実証された。この大極殿は、東西約53m×南北約28mの基壇上に9間×4間(約45m×約20m)という規模の建物で、平城宮のそれを移築したものであることが明らかとなった。中谷雅治は、その規模や礎石の材質から元来は藤原宮の大極殿であった可能性を指摘している^(注11)。その他、発掘調査では、大極殿院回廊、朝堂院南門と朝集殿院南門、朝堂院の東、西、南の一本柱列の塀、内裏西地区の掘立柱建物3棟とこの地区を取り囲む一本柱列の塀、内裏東地区の南北に並ぶ東西棟の大型掘立柱建物2棟と一本柱列の塀、西方官衙域の東西棟の掘立柱建物2棟、宮東南隅の南北棟の掘立柱建物3棟などが現在までに検出されている。そして、1992年度から大規模に宮四至の確認調査が実施され、宮の東西南北全ての大垣(築地)や側溝及び宮城門の一つ東面南門を検出し、1996年度には東西約560m、南北約750mの宮の範囲が確定した(第1図)。この宮域は他と異なって縦長で、面積も平城宮の約3分の1という独自かつ小規模なものであり、宮域が確定したことはこの遺跡の今後の保存活用に関しても大きな意義を持つものである。足利は、確定した宮域について、宮域外部の官衙群の存



第2図 足利説恭仁京復原図(注1報告書から転載)

在や平城宮に残った官衙の存在を示唆するとともに、首都機能の分化を想定している。^(注13)

なお、京域については、前述のように考古学的にはほとんど白紙に近い状態であり、恭仁宮独自と言うべき小規模な宮域が確定したことと京の遺構が検出されていないことにより、足利説京域についても再検討の余地がある。ただ、足利はあくまで自身の京域プランは「当初計画図」の復原案であり、修正の必要はないとした。^(注14) 足利説以降では、千田稔説^(注15)などがあるが、足利説と同じく確定した宮域との整合性など再検討が必要と思われる。

出土遺物に関しては詳しく触れる余裕はないが、現在まで約1,000点近くが出土している文字瓦など瓦に関する上原真人の詳しい研究、宮西面大路東側溝から出土した木簡8点の考察、一括資料ととらえることのできる出土土器の検討などが行われている。^(注16)

3. 今後の課題

発掘調査の進捗に従い、先学諸賢による発表時点までの成果と課題についての確に指摘した論考もあるが、現時点での主要な課題は以下のとおりである。^(注17)

(1) 宮内の課題

① 内裏・朝堂院

宮域は確定したが、内裏の範囲は現時点では未確定と言わざるを得ない。大極殿の北に一本柱列で囲まれた区画が東西に2つ存在していた可能性があり、便宜上、内裏西地区・内裏東地区と呼称している。西地区の範囲は確定しているものの、東地区は現状では北辺のみの検出であり、2つの地区の内部の建物も、2、3の主要建物以外は検出されていない。したがって、他の宮と異なる内裏が造営されていたのか、内部の殿舎配置はどのようであったかなど課題は多い。鎌田元一は、関係史料を検討した結果、宮の造営はまず内裏から進められ、天平13年7月初頭ごろには一応完成していたと考えており、^(注18) 現在も継続中の範囲確認調査で新たな知見が得られる可能性がある。

一方、朝堂院については、その範囲は確定しているが、内部の殿舎配置等については調査が進んでおらず、また大極殿院回廊の詳細や朝集殿の配置なども今後の調査に待たざるを得ない。

② 宮域

他の都より小さい宮域をいかに考えるのかも大きな課題である。複都制に關係して首都・陪都という役割で理解するのか、足利のように宮外に官衙群を想定したり、首都機能の分化ととらえるのかなど疑問は尽きない。聖武天皇が紫香樂宮や難波宮へ行幸を繰り返すなど当時の不安定な政局ともあわせてその機能・性格なども検討しなければならない。

(2)京について

①『続日本紀』の記事

京の存在に関して、以下のとおり『続日本紀』に関連する記事がある。

- ・五位以上の官人の平城京居住の禁止と平城京等から恭仁京への移住の督促(天平13年閏3月乙丑条)
- ・平城京東西二市の恭仁京への移転(同13年8月丙午条)
- ・恭仁左右京の百姓の調租の免除(同13年9月辛亥条)
- ・京都の百姓への宅地班給と賀世山西道による左右京の区分(同13年9月己未条)
- ・大宮に入った百姓20人に爵1級、都内に入った男女に物を賜う(同14年正月壬戌条)
- ・京中に飯の雨がふる(同14年6月戊寅条)
- ・宮城以南の大路の西頭と甕原宮の東に大橋を作るため、諸国に錢を賦課する(同14年8月乙酉条)
- ・大隅、薩摩等の仕丁を京進させる(同14年8月丁酉条)
- ・大風雨による宮中の屋牆や百姓廬舎の破壊(同14年9月癸丑条)
- ・左右京及び畿内の班田使の任命(同14年9月戊午条)
- ・参議左京大夫兼犬養石次の卒(同14年10月乙酉条)
- ・左右京、畿内の今年の田租の免除(同14年11月丙午条)
- ・参議民部卿藤原仲麻呂の左京大夫兼任、鴨角足の右京亮任官(同15年6月丁酉条)
- ・市にて市人の定京に係る意見聴取(同16年閏正月戊辰条)
- ・京職から命じて諸寺、百姓の舎宅の造作を進める(同16年閏正月癸酉条)
- ・恭仁京百姓の難波移住を許す(同16年2月乙卯条)
- ・恭仁京市人の平城への移転(同17年5月丁卯条)

大極殿が山背国分寺に施入されたという『続日本紀』^(注19)の記事が考古学的に裏付けられたことから、以上の記事も一応信をおけると考えてよいだろう。すなわち、これら京内への市の移転、市での意見聴取、官人・百姓の京への移住督促、官人への宅地班給、京職の任命、京内の百姓の租税の免除などの記事は、京の範囲もある程度定まり、官人や百姓も移住していたことを示唆している。岸 俊男は、遷都の本義は、単に天皇の移住にあるのではなく、より重要なのは政府機関の移転であり、それに伴う官人やその家族の移動であると指摘^(注20)しており、『万葉集』に大伴家持などが恭仁京にいたことを示す歌も見られることから、京はある程度機能していたはずであるが、全ての条坊までは十分施工が及ばなかったのであろうか。足利説や千田説と異なって、確定した宮域に伴う独自の京の区画が存在したのかもしれない。

また、京にかかわって、同じく『続日本紀』に以下の3つの橋が登場している。

- ・賀世山の東の河に架けた橋の完成(天平13年10月癸巳条)
- ・宮城以南の大路の西頭と甕原宮の東に大橋の造営を命じる(同14年8月乙酉条)
- ・(天皇が紫香樂宮から)恭仁京泉橋を経て恭仁宮に至る(同17年5月癸亥条)

これらの橋の現地比定も詳細に検討されているが^(注21)、橋の存在は当然、道路すなわち条坊とも関連する。少なくとも橋と橋に通ずる道路は条坊と関連するものであり、木津川が宮の南に東西に流れるこの遺跡の立地や平城宮との通交からしても橋の検討は大切である。

さらに、『続日本紀』に恭仁宮と関連して登場する城北苑・皇后宮・石原宮・甕原離宮・岡田離宮などについても注意を要する。これらの施設についても現地比定などの検討が行われているが^(注22)、宮や京の周辺に存在したのは確実であり、京域の推定に際しても参考となる。

②『万葉集』の用字

『万葉集』の用字を検討した結果、難波は1例を除き8例が「難波宮」とあって、「難波京」となく、恭仁の場合、題詞、左注にはすべて「久邇京」、「久邇京都」などとあって、歌の中でも「クニノ宮」という用例がないという岸 俊男の指摘^(注23)がある。難波宮も同じく京の条坊が確認されておらず、首都・陪都の問題とも関連して注意される。

③恭仁京の葬地

さらに、岸 俊男は、恭仁宮で亡くなった安積親王が宮の東北の和豆香山に葬られたことなどから、恭仁京の葬地についても若干言及しており^(注24)、宮周辺の奈良時代古墓の存在なども注意が必要である。また、宮の造営に伴って破壊されたと考えられる古墳の痕跡などが多く検出されており^(注25)、このことは和田 萃が指摘する喪葬令皇都条の規定と古代都城及び葬地との関連からも興味深く、葬地が京外に営まれたと考えられることは、古墓の分布状況から京域についても検討できるのである。

4. まとめ

以上の疑問、課題の解明に関しては、当然のことながら、宮内、すなわち内裏の範囲や大極殿院、朝堂院、朝集殿院の詳細を確認する発掘調査が大切である。また、推定左京域、特に宮に隣接する付近での綿密な調査も必要と思われる。宮に隣接する地域や橋につながる道路は当然条坊と関連する可能性が高く、宮の北東付近の隣接地域では恭仁宮時期の建物遺構やその時期の土器を多量に含む石敷溝なども出土しており、他の宮より小規模な宮の性格や京の条坊施工の進捗状況にかかわる有力な手がかりがつかめるかもしれない。

次に、宮と隣接していた可能性、もしくは宮と深く関連する城北苑・皇后宮・石原宮・甕

原離宮・岡田離宮についての現地比定やこれに関連した遺構の検出にも注意が必要であり、京と葬地との関係から、周辺の奈良時代古墓の分布などにも目を配るべきであろう。さらに、恭仁宮では現在のところ8点の木簡のほか20数点以上の墨書土器が出土しているのであるが、滋賀県信楽町教育委員会によって精力的に行われている推定紫香楽宮跡(宮町遺跡)の調査では、多数の墨書土器と3,000点を超える木簡(削屑を含む)など文字史料が豊富に出土している。^(注27) 遺跡の土壌や調査地点などにもよるが、今後文字史料の出土により、新知見が得られ、遺構の解明が進展することも期待できるので、文字史料の検出にもさらなる注意が肝要である。

それに関連して、平城宮跡の成果はいうに及ばず、紫香楽宮跡や難波宮跡の調査成果にも注目しなければならない。恭仁宮と紫香楽宮は「恭仁宮東北道」^(注28)によって結ばれており、聖武天皇の行幸や大仏建立などでも密接不可分の関係にあった。難波宮は複都制にも関係し、条坊の有無についても関心が持たれるから、これら遺跡の調査成果は必ず恭仁宮にも参考となると思われる。

平城還都によって荒れた恭仁宮は、『万葉集』に「三香の原 久邇の京は 荒れにけり 大宮人の 移ろひぬれば」(巻6-1060)などと悲しまれたが、この保存状態の良い貴重な遺跡の範囲や詳細を開発より先に明らかにし、有効に保存、活用していくことの大切さを最後に強調して拙い稿を閉じたい。

なお、恭仁宮跡の発掘調査や保存活用に関係する多くの方々から、小稿をなすに際しても様々な有益な御指導、御教示を賜りましたことを末筆ながら記し、深く感謝申し上げます。さらに、恭仁宮跡調査専門委員長として永年この遺跡の調査、研究に御指導いただき、1999年8月に御逝去になられました足利健亮先生、同じく保存・活用に大変尽力され、1999年4月に御逝去になられました堤圭三郎氏の御冥福を謹んでお祈り申し上げます。

(いその・ひろみつ=京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係長)

注1 森 正ほか『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』(京都府教育委員会 2000年3月)に現在までの発掘調査の成果がまとめられている。

注2 奥本沖太郎『恭仁京志』(恭仁尋常高等小学校) 1899年

注3 木村一郎「大養徳恭仁大宮趾」(『歴史地理』第1巻第3号) 1899年12月

注4 喜田貞吉『帝都』(1915年8月、『喜田貞吉著作集』第5巻(『都城の研究』) 平凡社 に拠る)。喜田は本書の最後において、これ以前に発表した都城関係の論考名を列举し、本書と内容の異なる部分は本書をもって前者を訂正したとことわっており、小稿も喜田説としたものは本書による。

- 注5 瀧川政次郎『京制並に都城制の研究』(『法制史論叢』第2冊 角川書店) 1967年6月
- 注6 瀧浪貞子『日本古代宮廷社会の研究』(思文閣出版) 1991年11月
- 注7 和田 萃「山背秦氏の一考察」(『嵯峨野の古墳時代—御堂ヶ池群集墳発掘調査報告—』京都大学考古学研究会 1971年3月)、井上満郎『渡来人—日本古代と朝鮮—』(リポート 1987年3月) 165頁など。
- 注8 恭仁宮・京に関する足利健亮の学説は、足利健亮『日本古代地理研究』(大明堂 1985年11月)に集大成されているので、小稿でいう足利説は本書による。
- 注9 発掘調査の成果については、『埋蔵文化財発掘調査概報(1974)』～『同(2000)』、計27冊(京都府教育委員会 1974年3月～2000年3月)、『恭仁宮跡発掘調査報告—瓦編—』(京都府教育委員会 1984年3月)、注1及び『加茂町文化財調査報告』第4集～第17集、計14冊(加茂町教育委員会 1987年3月～2000年3月)参照。
- 注10 『続日本紀』天平18年9月戊寅条。
- 注11 中谷雅治「恭仁宮大極殿跡の発掘調査について」(『史想』第18号 京都教育大学考古学研究会) 1979年6月
- 注12 宮内の地区名称は注1による。
- 注13 足利健亮『景観から歴史を読む—地図を解く楽しみ—』(日本放送出版協会) 1997年7月 29頁
- 注14 足利健亮『考証・日本古代の空間』(大明堂) 1995年2月 28頁
- 注15 千田 稔「都城選地の景観を視る」(岸 俊男編著『都城の生態』(『日本の古代』第9巻) 中央公論社 1987年4月)など。
- 注16 上原真人ほか『恭仁宮跡発掘調査報告—瓦編—』(京都府教育委員会 1984年3月)、上原真人「天平12、13年の瓦工房」(『研究論集』Ⅶ 奈良国立文化財研究所 1984年10月)、鍋田 勇・和田 萃「京都・恭仁宮跡」(『木簡研究』第19号 1997年11月)、鍋田 勇・森 正「恭仁宮跡平成8年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1997)』京都府教育委員会 1997年3月)など。
- 注17 中谷雅治「恭仁宮の造作工事について」(『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』 1983年4月)、高橋美久二「恭仁京と長岡京」(『仏教芸術』第154号 1984年5月)、久保哲正「恭仁宮」(『古代都城の儀礼空間と構造』(『古代都城制研究集会第1回報告集』 奈良国立文化財研究所 1996年1月)、森下 衛「恭仁宮跡の四至について—近年の調査成果から—」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年3月)など。
- 注18 鎌田元一「文献史料からみた恭仁宮」(『史跡山城国分寺跡保存管理計画策定報告書』 加茂町教育委員会) 1988年3月
- 注19 注10に同じ。
- 注20 岸 俊男『日本の古代宮都』(日本放送出版協会 1981年4月 108頁、のちに同氏『日本の古代宮都』 岩波書店 1993年5月に改訂)
- 注21 和田 萃「恭仁京遷都」(『加茂町史』第1巻 加茂町) 1988年3月

- 注22 最近の主な研究としては、中谷雅治「甕原離宮の位置について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年1月)、小山雅人「軒瓦から見た恭仁の皇后宮」(『京都府埋蔵文化財情報』第53号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、1994年9月)、注18文献など。
- 注23 岸 俊男「記紀・万葉集のミヤコ」(『日本歴史』第332号 1976年1月、のちに同氏『日本古代宮都の研究』 岩波書店 1988年11月に所収)
- 注24 岸 俊男「太朝臣安万侶墓と葬地」(同氏『日本古代文物の研究』 塙書房) 1988年1月
- 注25 肥後弘幸「恭仁宮造営以前の遺跡」(注1文献所収)
- 注26 和田 萃「東アジアの古代都城と葬地—喪葬令皇都条に関連して—」(『古代国家の形成と展開』 吉川弘文館 1976年1月、のちに同氏『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上 塙書房 1995年3月に所収)
- 注27 紫香楽宮調査委員会編『宮町遺跡出土木簡概報1』(信楽町教育委員会) 1999年11月
- 注28 『続日本紀』天平14年2月庚辰条。